

豊後の文語シンポジウム

土屋 博

大分縣は、過去に列車にてこそ通過すれ、其の地に降り立つは初めての経験なり。海あり山ありの風光明媚なる素晴らしき土地柄に感嘆すること頻りなり。食べ物は種類豊富、殊の外美味なり。人々の性格は、極めて眞面目にて堅實と覺ゆ。東京より同行の面々、大分には何かしら目に見えぬ不思議なる力宿れりと觀察す。歴史的に三浦梅園、帆足萬里、廣瀨淡窗、福澤諭吉など數多の偉人を生み出し來れるもむべなる哉。半年前の熊本・大分地震の被害、既に癒えたるが如くに見ゆるも心慰む。途中立寄りたる別府の温泉は湯量頗る豊富にて観光客に溢れ活況を呈し、大分便の飛行機は満席、大分市内のホテルも亦満室の状況なり。

扨て、今回の目的は「大分縣文語シンポジウム」にメイン・スピーカーとして出席することなり。日は十一月二十日、場所は大分縣立圖書館ホール、テーマは「豊の國と古典・文語―廣瀨淡窗を中心として―」なり。

二百名は入るてふホール、ほぼ満席に近し。淡窓の地元日田市ひたよりマイクロバスにて來れる参加者もある由なれば、身の引き締まる思ひぞする。

司会役は地元高校の放送部員の女子學生姉妹二人。若者にかかる機會を與ふる發想こそ斬新なれ。さすがは廣瀨淡窗を生み出せる教育縣か。

開會挨拶は、小矢大分縣立圖書館長。佐藤樹一郎大分市長より祝辭。續けて文語の苑加藤副理事長より文語の苑の活動状況につきてのスピーチあり。

愈々小生講演の順番となる。演題は「咸宜園等の私塾の活動を支えた文語」なり。まづ文語の雰圍氣に浸るべく、文語を音讀唱和する氣持ちの良さも皆にも味はつて頂きたしとの思ひより廣瀨淡窗の「桂林莊雜詠」（「道ふを休めよ」）、安井息軒の「三計塾の記」、柴野栗山の「雛鶯説」、吉田松陰の「松下村塾の聯」といふ四つのよく知られたる漢詩を聴衆と共に朗讀す。次に文語の特徴（簡潔にしてリズムあり、暗誦に適す。精神の集中力高まり、頭腦明晰ともなるらむ）を述べたるのち、私塾の開設時期（江戸時代後期に集中）につき説明す。次いで澁澤栄一、森鷗外、夏目漱石、湯川秀樹、福澤諭吉ら偉人たち如何なる教育を受けたるか、亦その教材（四書五經、歴史書等）につきても紹介す。最後に廣瀨淡窗の三奪法、月旦表、弟旭莊への候文の手紙、小生の淡窗に關する文語拙文を紹介して話を終ふ。

二人目の講演者は、別府大學名譽教授の後藤先生なり。淡窗の人と為りを示す文章を分り易く説明せらる。河野鉄兜の隨筆にある淡窓像は興味深し。「淡窗は瘦せて短小なる人にて、一の田舎翁なれども、動止語言の際、人を射るの英風あり」と。また、淡窗自傳よりの言葉、母の亡くなりたるときは「傷いたんで哀かなまず」、父の亡くなりたるときは「哀いたんで傷いたまず」と。

休憩の後、地元子供たち（小天眞道流劍舞道の方々）による劍詩吟詠、披露せらる。演題は四つ全て廣瀨淡窗の有名なる漢詩なり。朗々たる朗詠に加ふるに小氣味のよき劍舞、まさに心洗はるる心地こそすれ。

パネルディスカッションのテーマは「古典・文語とグローバル時代を生きる人々」なり。

コーディネーターは佐藤大分縣文化課長。パネラーに淺野別府大學文學研究科長、鳥井大分大學教授も加はる。

小生よりは、グローバル化の最先端に居られし岡崎久彦先生（文語の苑の創設者の一人）、常に「日

本の存立」確保に全身全霊を打ち込まれたるが、晩年に文語普及の重要性を唱へられ、シンポジウムにて自ら諸葛孔明の「出師の表」を諳んじられたること、また、没後岡崎氏を顕彰して、文語の苑として文語作文コンクールを創設し、應募作品募集中なることなど紹介す。

パネルの最後には、淡窗の弟久兵衛の末裔たる廣瀬勝貞大分縣知事（小生の先輩に當たる）自らシンポジウムを見事に締めくくらす。その手際の鮮やかなること、DNAは争はずと覺ゆ。淡窗の時代には既に蘭學を通じて外國の情報もかなり把握せることなど改めて認識することを得。

大分縣側のシンポジウムに對する準備は用意周到、會議の運営ぶりも見事といふほかなし。

大分は文語普及活動を展開するに相應しき土地柄なれば、今後文語教室開設機運の醸成せらるるを切に期待する次第なり。

（平成二十八年十二月二日受附）